

2024年度 ソニー幼児教育支援プログラム  
「科学する心を育てる」  
～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

つなげて つながる 命との出会い



バタフライガーデン

ミカンの木にいる  
ナミアゲハの幼虫  
“写真を撮ろう!”

思いを寄せたチョウになる

ダンボールやポリ袋でチョウの  
羽を作ったよ  
チョウになって飛ぶのっておもしろい  
お花にとまって蜜を吸うよ



# 目 次

- I はじめに . . . 1
- II 自然と共に暮らす子どもたち . . . 2
- III 「つなげて つながる 命との出会い」  
について . . . 2
- IV 実践事例
  - 令和4年度～令和6年度の子どもたちの姿より  
つなげて つながったもの（3歳児～5歳児） . . . 4
  - 小さな命を守りたい（5歳児）  
（令和6年5月～7月） . . . 5
- V 子どもたちの思いは未来につながる . . . 14
- VI 研究を振り返って . . . 15

# I はじめに

## ① はじめに

急速に進む少子化の中で、『こどもまんなか』社会の推進が謳われ、世の中が未来を生きる子どもに注目している。また、持続可能な開発目標 SDGsにより、未来の地球の幸せを考えていくことが推進されている。子どもたちの未来はどんなふうになっているのだろうか。子どもたちが生きる未来の地球はどうなっているのだろうか。その中で、子どもたちは、どう生きていくのだろうか。変化の激しい予測不可能な社会を、様々なことに向き合い、考え、自分の力で力強く生きていって欲しいと願っている。

現代社会において、情報化の中に浸って生活している子どもたちには、間接体験だけではなく直接体験が大切である。乳幼児期は、心を動かし五感を通した体験の中で、豊かな心を育むことができると考える。中でも自然体験は子どもたちの五感を最大限に発揮させてくれる。

レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』（新潮社1996、P23）に“もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう”とある。このような感性を乳幼児期に育むことは、その後の人生の生きる力につながっていく。私たちは、子どもたちと一緒に様々なことを感じる毎日を積み重ね、これからの時代を生き抜く力の源を育みたいと思っている。

私たちは、地球の中で命の恵みを受けながら生かされている存在である。自然と関わることは、心を動かすことであり、命と関わることであると思う。子どもたちの身近にある命。この命も地球の一部である。命との関わりに心動かせる子どもに育てたいと願っている。

## ② 本園について

本園は、奈良県大和郡山市の西南、市街地から離れたところに位置し、松尾山のふもと、矢田山丘陵を背にした緑豊かな自然に囲まれ、田畑や畔などが身近にあり、自然を感じるができる環境にある。

園児数は、3歳児2名、4歳児11名、5歳児9名という小規模園である。

広い敷地の中に平屋建ての園舎、園庭、中庭、そして遊びの森（木々や草、丘、小川がある。身近な自然と触れ合える場）がある。

隣接する地域の方の田畑は子どもたちの第2の園庭となっており、草花摘み、虫や小動物との触れ合い、ジャガイモ・サツマイモの栽培、田んぼ遊び、田植えや稲刈りなど、子どもたちの遊びや体験を豊かにしてくれている。田畑を園児の第2の園庭にまで思わせてくれる地域の方は、園児のために、とても心をくだいてくださっている。

保護者は、穏やかに園や子どものことを見守ってくれており、教育ボランティアに所属する方々は、行事や田んぼでの活動に力を貸してくださっている。

職員は、保育園・こども園との人事交流や転勤などでメンバーが流動的に変わっていくため、研修の方法など工夫して行っている。



## Ⅱ 自然と共に暮らす子どもたち

広い園の敷地には、遊びの森があり、四季を織りなす木々、草むらや丘、小川があり、季節や気候とともに様々な様相を見せてくれる。春から夏にかけて、たくさん現れるテントウムシのたまごや幼虫・成虫たちは、子どもたちの目をくぎ付けにする。子どもたちが一歩、二歩と歩くとツチガエル・アマガエル・トノサマガエル（絶滅危惧種）などいろいろなカエルたちが跳び出し、バツガとび交う。タマムシの姿を見かけることもある。小川には、時折ヤゴの姿が見え隠れする。トンボやチョウに子どもたちはわくわくしながら集まる。木々の葉の音が風と共に心地よく聞こえる。秋には、クヌギやシラカシといったドングリが子どもたちを魅了し、地域の様々なところにドングリ探検に出かけ、子どもたちはドングリ博士となる。木々の葉が海のように落ち、子どもたちは落葉の匂いとともに埋もれて遊ぶ。冬には、矢田山おろしの強風が吹き荒れる中、風の子になり吹きすさぶ風さえも、子どもたちにとっては、友達である。



1年を通して様々な季節の変化の中で、子どもたちは自然の営みと共に暮らしている。

令和5年度には、自然環境の豊かな園の特色をさらに生かしていきたいと考え、奈良県奈良っ子はぐみ自然保育認証施設としての認証を受けた。自然の中に身をおき、自然と向き合い対話したり、自分と対話（自分はどう感じ、どう思うのか）したり、先生や友達と一緒に感じ合ったりする保育を大切にしている。私たちは、自然と関わることは、すなわち命と関わることだと捉え、保育に臨んでいる。

私たち大人は、子どもたちとの暮らしの中で、心動かす様々な出会いを大切に、子どもの思いや願いを見つめ、そこに何が育とうとしているのかを感じながら、共に育ち合いたいと思っている。

また、一人一人個性の様々な子どもたちが、その子のよい状態（ウェルビーイング）で生活ができるように心を配っている。子どもが心を落ち着かせ、自然体でよい状態でいられるために、職員がよい状態であること、職員同士がつながりながら、子どもが心を動かす周りの環境とよりよくつながっていくことができるようにと取り組んでいる。



## Ⅲ 「つなげて つながる 命との出会い」について

### <科学する心について>

乳幼児期に、心動かし出会ったり、感じたりして心に残ったことは、やがてその子の感性や原風景となっていく。子ども時代が、子どもの人生の源となり土台となっていく。幼児期の教育は、生涯にわたる豊かな感性や学びの基礎を培う大切な時期だと考えている。これは、その子のありようや生き方につながっていくものだと考える。

幼児期は、体験を通して、五感で感じながら体得したり心に残したりしていく時期である。子どもの身近にある命あるものは、子どもの五感に働きかけてくれる。命あるものと出会った子どもは、きれいだな、かわいいな、どうなっているのかな、と気持ちを向ける。気持ちを向け、心を動かし関わっていく中で、命あるものと子ど

もはつながっていく。触れて感じたり、心動いたことを伝え共感しようとして、周りの人ともつながっていく。名前や疑問をもったことを調べ、こんな風になっていると発見し、知る楽しさを味わうとともに、もっと関わりたい気持ちが膨らんでいく。また、子どもは、命あるものどうつながっていきこうかと試行錯誤を繰り返す。こうして、子どもの感じる心や好奇心・探究心は、次へ次へとつながっていく。このような一つ一つを子どもと共に丁寧につなげて積み重ねていく毎日が科学する心を育てていくと考える。科学する心は、子どもが心動かした出会いが様々につながっていく中で育まれるものである。そしてそこには、いつも子どもの感性が働いている。豊かな感性を育てることは、科学する心を育てることにつながる。

### <“つなげて つながる 命との出会い”について>

子どもは、自然との関わりの中で、様々な命あるものと出会う。命あるもの、すなわち命と出会った子どもは、かわいいな、小さいな、触ってみたい、おもしろい、など心揺さぶられ、子どもと命はつながり出す。保育者は、その瞬間を大切に、子どもの思いを見つめたり、寄り添ったりしていく。子どもの思いを受け止める保育者の存在は子どもと命をつなげていく。同時に寄り添う保育者の心も揺さぶられる。保育者は、子どもが出会った命に感動するとともに、命と出会い心動かす子どもに心動かす。こうして命と保育者、子どもと保育者がつながっていく。

命に関わる子どもの心に、思いや願いが生まれる。子どもの心の動きを見つめる保育者は、子どもの思いや願いを子どもと共に叶えたいと思い、子どもと共に考え、調べたり試行錯誤したりするようになる。子どもの願いは、保育者の願いへとつながっていく。願いを叶えるために子どもと共に進む環境の構成は、思いや願いをつなげるものとなる。

命との出会いにより感じるかわいい、おもしろいといった気持ちは、友達はもちろんクラスを超えて子どもたちに伝播しながらつながっていき、同時に子ども同士をつなげていく。また、子どもの思いや願いは、年度を超えてつながっていく。

子どもと保育者が心を動かす中で、“つなげて つながる”連鎖が次々と生まれていく。

命や子どもとつながるのは、保育者だけではない。保護者や地域の方など子どもの周りにいる大人も、“つなげて つながる”存在となる。

様々な人と人がつながり合って、“つなげて つながる”連鎖が生まれていく時、科学する心が育まれている。

今回報告する本園の命との出会いは、チョウのたまごとの出会いであった。子どもたちは、小さな命に心動かした。ある日、たくさんあったたまごからようやく育ったたった1匹の幼虫が姿を消す。子どもたちは大騒ぎとなる。どうしてなくなったのか考えを巡らす。その時、新たな命が生まれていて、この命をどう守ろうか相談し考えた。自分たちの感性をもって命をつなげていこうとしたのである。しかし、つなげようとしてもつながらない命が存在することに出会う。子どもは、守ろうとしても守れない命があることを感じた。自然・命というものが自分たちの力ではどうにもならないことを、身をもって感じた。

幼虫の命をつなげていこうとした時、子どもたちは、飼育ケースに入れるのではなく、あるがままの状態、幼虫の命をつなげる方法を考えた。幼虫にとっての“よりよい”（よりよい状態＝“よりよい”と表す）を考えたと感じられた。ここに子どもの感性が働いている。その後、幼虫にとっての“よりよい”を考えながら、幼虫の命をチョウへとつなげていこうとする。私たちは、子どもが幼虫にとっての“よりよい”を考えていく中で、様々なことを感じ、考え、自分たちの暮らしを豊かにしていることに気付いた。幼虫にとっての“よりよい”を考えることは、子どもにとっての“よりよい”につながっていたのである。それだけではない。子どもと共に、心を動かし命と向き合っていく中で、保育者もまた、“よりよい”を考える大切さを子どもから学んだり、子どもの暮らしがよりよくなることを感じたり、命の一つ一つの出来事に感動し、命に対する畏敬の念を抱いたりすることとなる。子どもと共に“よりよい”を考える毎日は、保育者の“よりよい”にもつながっていた。

“よりよい”を模索し、考えていくことは、科学する心を育むことへとつながっている。

命と出会い、“つなげて つながる”暮らしの中で育まれていった科学する心を、実践を通して見つめたい。

# IV 実践事例

令和4年度～令和6年度の子どもたちの姿より  
つなげてつながったもの（3歳児～5歳児）

## <チョウに来て欲しい>（令和5年5月～7月）

令和4年度3月、年長児が1年間撮ってきた大発見の写真をまとめた自分図鑑を作成し、卒園記念に持ち帰る。自分図鑑のコピーを見て、令和5年度の年長児は自分たちも作ろうと写真を撮り、大発見ボードに貼り出す。

5月下旬  
遊びの森にて  
「チョウを捕まえて  
写真を撮りたい」し  
かし大きいチョウ  
は、はるか上を飛び  
回り、なかなか捕ま  
えられない。

令和4年度に行った昆虫館で、チョウ  
が毛糸のポンポンに群がっていたこ  
とを  
思い出  
す。



「なんでちょうちよいっ  
ぱいとまってるのかな」  
「甘いものがついてそ  
う」「お花の蜜塗って  
ると思う」など考える。家  
で調べてくることにす  
ると、家族と一緒に考  
えてきた。

- ・花の蜜や果物の汁を吸う
- ・はちみつが好き
- ・カルピスを吸う
- ・ガムシロップに水を混ぜると来るかもしれない。

「調べたことと合  
った」「やっぱり  
カルピス入って  
た」「ポカリも入  
ってたのか」と予想  
と照らし合わせる。



昆虫館の人に聞いて  
みよう

- ①毛糸に何が  
ついて  
いるのか
- ②量はどの  
くらいか
- ③どんな所  
に仕掛  
けるとよ  
いのか

液を作りスプレー  
するが、全く来  
ない。



ガムシロップを持  
参した子がおり、  
試すことにす  
る。



聞いた通り液  
を作り試す。



捕まえたモンシ  
ロチョウをくっ  
付けてみる。口  
吻を伸ばし吸  
うの確かめ大  
喜び。

やってきたのはヒ  
カゲチョウとミツ  
バチ。思ったチョ  
ウとは違うが自  
分たちの仕掛け  
に来たことが嬉  
しい。

- なぜ来ないのか  
考える。
- ・昆虫館と環境が  
違う
  - ・チョウによっ  
て好きなもの  
が違う など

つなげて

子どもの願いと保育者の思いがつながって

つながる

自分たちの  
してきたこと  
を知らせる  
（令和5年度  
年長児）



## バタフライガーデンを作ろう!

チョウの食草がいっぱいの庭に

令和6年度へつながる



チョウに来て  
欲しい!  
みんなの願  
いのこも  
ったバタ  
フライガ  
ーデン作  
り

キャベツ畑の  
モンシロチョウの  
幼虫をデジタル  
顕微鏡で見  
てみよう。



「スーパーのキャベツ  
も食べた!」あおむし  
は「キャベツ」を  
食べると分かる  
年長児。



キャベツ畑で年中児が見  
つけたあおむし。飼育ケ  
ースに葉っぱとともに入  
れる。しかし、あおむし  
が食べるキャベツが入  
っていない。C保育者が  
そっとキャベツを入れて  
おく。翌日「あ、キャベ  
ツだけ食べてる!」「キャ  
ベツしか食べてないよ」  
と大発見!それからは、  
キャベツをあげるよ  
くなる。



穴だらけのキャベツ

幼虫の絵を描きたい!

チョウ・幼虫をカメラで撮影

モンシロチョウの  
幼虫のウンチを  
実体顕微鏡で  
見てみたら・・・  
そして写真を  
撮ろうと大苦戦。  
「撮れた!」  
「もしましやして  
る」  
「食物繊維や」



キャベツ畑が大変!  
と年中児。見ると  
あおむしがいっぱ  
い。「かわいい」「か  
わいいなあ」と手に  
這わせたり匂いを  
嗅いだり。



年長児がチョウに  
なりたいとポリ袋  
やダンボールで思  
い思いの羽を作  
り、背中に着け  
飛んで楽しむ。た  
ちまち年中児年  
少児にも広がる。  
（表紙写真参照）

このようなたくさんの命とつながろうとする姿の中で、つなげてもつながらない命との出会いもあった。つなごうとした命、つながらなかった命と出会い、保育者と子どもたちが共に感じていったことを、報告したい。

## 小さな命を守りたい（5歳児）（令和6年5月～7月）

4月、バタフライガーデンにやって来たたくさんのチョウに大喜びの子どもたち。チョウが姿を見せるたび、「あ、ちょうちょ!」「ちょうちょ来てる」「バタフライガーデン、大成功やな」と言っていた。

保育者たちも、チョウが来てくれたことによかった、と安堵の気持ちと嬉しい気持ちでいっぱい、子どもと一緒に、また職員同士で、喜び合った。これからたくさんの命と出会い、たくさんの命が育っていくんだ、と期待でいっぱいであった。

しばらくは、「わーい!ちょうちょ」と飛ぶチョウを笑顔で追いかけたり、意気揚々と虫とり網を持って捕まえようとしていたりしていた子どもたちだった。5月頃、アゲハチョウがよく来るようになり、よく見ると、時折、お尻を葉っぱに付けている。「ちょうちょさん、そっと見てみよう」とそばにいた子どもたちに保育者が声をかけると、少しずつ花やミカンの木にとまっているチョウの様子を見たりする姿が見られるようになってきた。

### たまごとの出会い

5月20日（月）朝、ミカンの葉のハモグリガの幼虫の迷路を見ていたA児が、A保育者と一緒に「これ何?」「こっちにも」「こっちもある」「ひょっとしてたまご?」とアゲハチョウのたまごがたくさんついていることに気付く。たまごがどんなものか知らなかったA児は、「大発見タイムでみんなに言いたい!」とたまごとの出会いを喜ぶ。大発見タイムというのは、見付けたこと、大発見した!おもしろい!と心を動かしたことなどをクラスのみんなに伝えたいという子どもの思いと、個々の情報をみんなで共有できたらとの保育者の思いとから始まったもので、大発見した!伝えたい!と思った時に行く。A児の早くみんなに伝えたい、と言う思いを受け止めたいと朝に大発見タイムの時間を設けた。A児がみんなにこのことを伝えると、みんな興味をもち「たまご?!」「見たい見たい」「見に行こう!」となった。小さなたまごを見つけ、「これかあ」「あった」「ここにも」「ここにも」と喜ぶ。その後、たまごから小さな1匹の黒い幼虫が生まれていた。「ちっこいやつ、生まれてた」と嬉しそうに見つめ、子どもたちの中に、やがて少しずつゆっくり大きくなっていく幼虫を楽しみにする気持ちが芽生え始めた。

### <考察>

・小さな命との出会いだった。チョウのたまごをまだ知らない子どももたくさんいたが、A児の発見により、クラスのみんなに広まるとともに、「たまごが生まれてるんだって」「え、どれ?」「これがたまご?」「ほんとや」と他の学年にも広まる。これまでは、個々や気の合う友達、そこに居合わせた子どもたちでの発見だったが、たまごで子どもたちがつながり始めた。早く大発見タイムで知らせたい!というA児の思いを受け止めたいと思い、すぐに時間を設けたA保育者。みんなで見たたまごからやがて幼虫が生まれ、チョウの命に気持ちを向けていくことにつながっていく。チョウと子どもたちがつながっていくきっかけとなった。



バタフライガーデンのミカンの木のあちらこちらに小さなたまごが産み付けられていた。



薄黄色の小さな真珠のようだったたまごのうち数個は、数日経つと色が変わっていった。



たった1匹。4齢幼虫くらいにまでなった幼虫。大きくなってきたね、と子どもも保育者も楽しみに見ていた。

ミカンの木に念願の大きいチョウたちが来たことを、子どもも保育者も喜んでいました。たまごもたくさん見付けていた。しかし、たくさん産み付けられたたまごからなかなか幼虫が育たない。クロアゲハが来た時には大喜びで、お尻を葉にちゃんと付けた瞬間を数人の子どもたちと見ることができ、「産んだ!」と喜び合った。クロアゲハがここで生まれたら最高!と喜んだ。産み付けられたであろうたまごに印をつけておいた。しかし、突然やってきた暴風雨でたまごも印も無くなってしまった。こんなに育たないの?という思いだった。つながらない命の多さに驚いた。だからこそ、たった1匹の幼虫をととても大切に、子どもたちと見ていきたいと思っていた。



しかし、

## 大事件!

### どこにいっちゃったの?!

5月30日(木)幼虫は成長し、4齢幼虫になっていた。子どもたちも「大きくなったなあ」と入れ替わり立ち替わり様子を見ていた。ところが、預かり保育の時間、B保育者が「あれ、幼虫は?!」と探していると、B児とC児も来て一緒に見始める。しかし「あれ?」「どこ?」姿が見えない。よくよく探してみるがどこにも見当たらない。居合わせたC保育者も一緒に探すが見つからない。「ええーっ!本当にいないね。どこに行っちゃったの?」と4人で探していると、2人の母親が迎えに来る。B児が幼虫がいなくなったことを伝えると、母親たちも探してくれたが姿は見えない。「どうしちゃったんだろう」と言っているとB児の母親が「あ!ちっちゃいの生まれてる」と生まれたばかりの小さな幼虫を発見する。そしてB児が「こっちにも!」と発見し、2匹の新しい命と出会う。「明日、みんなに知らせよう」「大事件や」と言ってB児とC児は帰って行った。

虫眼鏡で見たら  
見つかるかも!



「大きい目で見たら、  
よく見えるはず!」  
手で目を大きくする



### <考察>

- ・保育者たちは、この出来事を共有する。子どもたちと一緒にチョウになるまでを楽しみに見たい!と思っていた保育者たちは、とても残念な気持ちだった。ようやく育った幼虫を大切にしていきたいと思っていた。「明日みんなに知らせよう」というB児とC児。みんなのバタフライガーデンで起こったことなので、みんなに知らせなくちゃと思ったのだろう。
- ・保護者ともつながりたいと思い、ホームページなどでバタフライガーデンのことを知らせたり、参観で子どもと一緒に幼虫を見てもらったりして情報発信していたため、保護者も、子どもやバタフライガーデンのことを分かって、関わってもらうことができたと思う。

翌日

### 大変です。幼虫がいなくなりました!

5月31日(金)朝、幼稚園全員がホールに集まると、B児とC児がみんなの前に出て、幼虫がいなくなったことと2匹の小さい幼虫が生まれていることを伝える。「探しに行こう!」という声があがる。「いっぺんに行ったらいっぱいになるから、順番に見に行こう」「まずは、すみれ組からや」と年長児が先に探しに行く。大変なことになったという雰囲気を年中と年少の子どもたちは感じ、「見付かるかなあ」とその場でちゃんと待っている。保育者たちも子どもの思いを尊重し、子どもたちが進めていく様子を見守る。

## 幼虫はどこだ！

隅々まで一生懸命探す年長の子どもたち。ところが、どこにも見付からない。「葉っぱの裏は？」と探すがいない。「いないなあ」「たんぼ組さんとりす組さんに言いに行こう」とホールに戻り、「いませんでした」と報告する。年中たんぼ組が「よし、見に行こう」と声をあげ、年少りす組と共に探しに行く。「いないなあ」「どこかなあ」と探していると、ホールで待ちきれず年長児たちがやって来てみんなで大搜索。

大事件です。ミカンの幼虫がいなくなりました

小さい幼虫が2匹生まれています



どこかなあ

いないなあ

どこにもいませんでした



小さいの、これだね



この子ちょっと形が違うね  
動き方も元気。よく動くね。全然違う  
違うちょうちよかな？どんなちょうちよになるのかな？楽しみにしよう

## 子ども会議 ～あの子は一体どうしたんだろう？新しく生まれた幼虫は？～

みんなで探すが、見付からない。がっかりしながらみんなはまたホールに集まり、話し合いが始まる。

「あの子は一体どうしたんだろう？」「鳥に食べられたのかもかもしれない」「カマキリかもかもしれない」「へびかも」「アリかな？」「クモかな」「ハチかもかもしれない」「ムカデ？」など、子どもたちは考えられる生き物を思い浮かべ、想像を膨らませる。「せっかく大きくなってたのに」とつぶやくB児。残念に思う気持ちが感じられた。そして、このままにしておくと、新しく生まれた幼虫も、食べられたりしたら大変だ！と子どもたちは対策を練り始めた。「また、食べられちゃったらあかんもん」「どうしたらよいかな・・・」「うーん・・・」みんなは考える。しばらく真剣に考えていた。すると、A児が「あ！ゴミにかけてある網みたいなのをかぶせたら？カラス来ないようにかぶせてるやつ」みんな「ああ！」と納得の様子。B保育者は「よし、ちょっと待って！倉庫にないか見てくるね」と言って探しに行く。みんなは、「いいのあるかな」と首を長くしながら待っている。そして、子どもが選べるようにと4種類の“網”を持ってきた。

## 子ども会議 ～新しく生まれた幼虫を守ろう～

子どもたちは、網を触ってどれがよいのか考え出した。「これは、くちばしが入るんじゃない?」とA児が自分の指を網目の穴に差し込む。すると、みんなもそれぞれ網に指を差し込み、確かめる。「ほんまや。くちばし入ったらまた食べられちゃう」「これ、穴大きいわ」「これはだめ」と黒い網はやめておく。白い網と緑の網を比べる。「こっち(緑)でもいいんじゃない?」「でもくちばし入りそう」「大丈夫ちがうか?」「でもハチとか入れるで」「こっちは・・・」と今度は白い網を広げ、みんな触り出す。「これや。これがいい」とA児。B児も「これ、くちばし入らへんな」と言い、みんな「絶対これ!」「どこからもくちばし入らへん」「これいいな」と言い、白い網に決まる。年長の子どもたちは、帰りに網をかぶせ、朝来たら網を外す毎日が始まった。

これは小さすぎやろ!



ミカンにかぶせられない



網を触って確かめる。



みんなで幼虫を守ろぞ!  
エイ、エイ、オー

### <考察>

- ・成長を楽しみにしていた幼虫がいなくなってしまったという厳しい現実に対し、「せっかく大きくなってたのに」という子どもの言葉は、自然の厳しさをどこか感じているのではないだろうか。日常の中で飼っていた生き物が死んでしまうことはある。また、たくさんの育たないたまごがあったことも事実である。しかし、たくさんある小さなたまごから1匹、ようやくここまで大きくなるのを見守ってきた幼虫が、食べられてしまった(と子どもたちは考えた)という現実。子どもたちは、つなげようとしてもつながらない命と出会うことになった。
- ・新しく生まれた命をつなげようと、みんなで考えた子どもたち。みんなで集まり、一緒になって考え合い話し合ったことで、「幼虫を守らなければ!」という思いが子どもたちに広がったと思われる。
- ・子どもたちが幼虫を守ろうとした方法は、飼育ケースに入れるのではなく、ミカンの木に網をかぶせるというものだった。なぜ、そのままの状態で幼虫を守ろうとしたのか。生まれた場所、あるがままの状態で命を守ることが、幼虫にとって“よりよい”状態でいられると感じていたように思われた。子どもたちが、子どもたちの感性でそのままの状態でいさせようとしたことで、幼虫との関わりは飼育ケースの中で見守るのではなく、今まで通り、自然のままの幼虫との関わりとなる。また、飼育ケースの中の幼虫の“観察”ではなく、自然の中にいるあるがままの幼虫を見守っていくことになった。
- ・大事なお知らせがあるということで集まった子どもたち。年少児も一緒に集まっていた。年少児にとっては、難しい話であり、長い時間であったと思う。しかし、いなくなった幼虫や新しく生まれた幼虫について、真剣に話し合う年長児・年中児たちの中に一緒にいて、思いや考えに少しでも触れる経験をしたと思う。小規模園においては、遊びや生活は、みんなで関わり合って創りあげていくことが大切である。こうして、学年の枠を超えてつながっていく。

## ミカンの木についている虫たちをどうしよう

「開いてるところはないかな」「中に入れないように」とぐるっと網をかぶせ洗濯ばさみで止める。網をかぶせながら、子どもたちは気付いた。「あかん、ワタムシがいる」「アリもいる」「クモもいる」ミカンの木についているのだ。みんなでそれらを一生懸命取って、その後相談が始まった。「たんぽぽ組さんやりす組さんに知らせないといけない」「ワタムシを見つけたら取ってここにに入れてもらおう」とさっき取ったワタムシを入れたケースを指さす。「クモいたよ」「アリもいたよ」「じゃあ、どうする?」「う～ん、どうしよう?」と考えていく。

6月3日(月)朝、年長の子どもたちは、「みんな、お知らせがあるから集まって!」と年中児・年少児に声をかけ集めて、金曜日に話し合ったことを伝えた。



「みんな聞いて!」大切なことを伝える。

下もしっかり止めておこう



### <考察>

・子どもたちは、気付いたことから思いを出し話し合い、年中児・年少児に伝えなければと主体的に自分たちで行動する姿が見られた。なんとかしたい、今度こそ自分たちの手で幼虫を守るぞ、という気持ちが伝わって来るようだった。子どもたちは、幼虫の命をつなげていこうとしていたと考える。また、その気持ちが、年中児・年少児たちにも伝わり、真剣に聞く様子が伺えた。

## どうしちゃったの?

その後、もう1匹小さい幼虫を見付け、ミカンの木の幼虫は3匹となる。

しかし、自然というのは厳しいものである。ある日、幼虫の様子を見ていると、3匹のうち1匹の様子がおかしい。B児が「あれ、ちっちゃくなってる」と言うと「どうしちゃったのかな」とC児。「こっちは大きくなってきてるのに」「もう死んじゃったのかな?」「くしゃってなってる」「わからへん」・・・しばらく沈黙の後、くしゃとなっている幼虫を見つめながら、小さな声でそっと「ゆっくりさせといてあげよっか」とつぶやくB児。思い描いていたのはたかさんの幼虫が育っていくバタフライガーデンであったが、つながらぬ命とまた出会うこととなった。

### <考察>

・B児が幼虫を見つめながらそっと言った「ゆっくりさせといてあげよっか」の一言からは、一生懸命守っても消えていってしまう命もあるということをもっと感じたことが伝わってくるようだった。また、今まで大きくなろうとしてきたんだね、頑張ったね、という、尊い命への思いが感じられた。

## これはなんの幼虫かな?

幼虫はまた、時間をかけゆっくりと大きくなっていった。子どもたちの中から「なんの幼虫だろう」という疑問が出てきた。「何やる」「何やるな」と話し、「チョウやで」「でもどんなチョウかわからへん」E児「絶対アゲハやろ」「図鑑で調べようよ」「ちょっと待って、チョウになってからの楽しみにしよう」といったんは調べずにいることになった。

## ミカンの葉っぱ、食べてるところ 見たい!

大事件以来、子どもたちは、通りがけにバタフライガーデンやミカンの木に立ち寄り、様子を見てはどこかへ行くようになった。保育者も幼虫が気になってしょうがない。ふと立ち寄ったバタフライガーデンでB保育者は、

幼虫がちょうど葉っぱを食べているところを目撃する。子どもたちを呼ぼうとしたが、園庭に遊びに行っている。B保育者は、動画を撮り始めた。しばらくすると、たまたまB児とC児が通りかかり「何してんの?」と寄ってくる。動画を撮っていることに気付き「どうしたん?」と聞いてくる。「ほら、食べてる!」そして、二人がのぞいたとたん、幼虫は食べるのをやめ、向きを変えて歩いて行く。「え～見たかったのに」と残念がる。「動画撮れたよ」と言う。「見たい!」と目を輝かせる。

### 葉っぱ食べて大きくなっていくよ

翌日、動画を見る。「食べてる食べてる!」「次は、下から食べてる」「背中にトゲトゲあるなあ」「かわいいなあ」「オレンジのどこついてる」「オレンジの上で食べてる」「まだ、食べてる」「食べすぎやろ」「すごい、はらべこやなあ」と嬉しそうに見る。「こーやって食べてる」「ムシャムシャムシャ」と幼虫になったり、「あ、食べるのや～めた!やっ」と幼虫の気持ちになって言葉に表したりするなどの姿が見られた。「たんぽぽ組さんも呼びに行こう」と自ら誘いに行き、もう一度動画を見る子どもたち。動画を見て以来、毎日「食べてるかなあ」「葉っぱ食べて大きくなってると友達と話しながら嬉しそうに幼虫を見る姿が見られた。



ムシャムシャ

葉っぱを食べる幼虫になる

#### <考察>

・自然は、いつも思うようにならないものである。見ようと思った瞬間に食べるのをやめてしまった。しかも、飼育ケースの中でいつでも見られるところに幼虫がいるのではなく、バタフライガーデンにいる環境の中では、なかなか見ることができなかった。見たかったのに見られなかった幼虫の姿を、動画を通して友達と一緒に見ることができ、子どもたちは、幼虫が大きくなるとより嬉しい気持ちになったように思う。動画によってさらに子どもと幼虫をつなげることができた。

### 幼虫はナミアゲハの幼虫

子どもたちに見守られ、幼虫は無事大きくなり、いなくなった1匹目と同じくらいにまでなる。すると、どんなチョウになるのか楽しみにしていた子どもたちは、どうしても調べたくなってきて、とうとう図鑑で調べるようになった。E児の言う通りアゲハで、ナミアゲハだということが分かり、楽しみにする。

#### <考察>

・幼虫を毎日守るとともに、ムシャムシャ食べる動画を見て大きくなっていくことを実感していく中で、やっぱり早く知りたい、という気持ちになったのだと思う。



### 幼虫が危ない!

やがて幼虫は、緑の5齢幼虫となり、子どもたちや保育者に見守られていた。6月24日(月)降園前、かぶせていた真っ白い網の外側でさなぎになろうとしていた幼虫を年中児とB保育者が見付け、やってきた年長児に伝える。「(網から)出てる!」「え!丸見えやん」「危ない!」「危なすぎる!」と考えた子どもたちとB保育者は、ミカンの木に戻そうとした。(この時、幼虫はミカンの木を離れ、さなぎになる場所を探すのだとは知らなかった)しかし、何度付けてもミカンの葉に幼虫はくっ付こうとせず、くっ付けてもくっ付けても落っこちてしまう。「なんでくっ付かへんの?」「がんばれ!」と言うが、幼虫は、落ちてしまいくにやくにやす。「あー痛い」。持とうとする年中児

に「そんなに手で持ったらあかん」「死んでしまうやん」と年長児。このままだと死んでしまうと考えた子どもたちは最後の手段として飼育ケースを持って来て幼虫を入れることにした。飼育ケースを取りに保育室に行った子どもと一緒にA保育者もやって来る。べちよとしたウンチが葉っぱに付いているのを見つけたA保育者は、「大変、もうさなぎになる!このウンチ、たくさんウンチしたら、さなぎになる!」と思わず声をあげる。「これなん?」とウンチをのぞき込む子どもたち。そして、そっとケースに幼虫を入れ、保育室に持ち帰る。幼虫は、ケースの壁を登ろうとするが、何度も落ちてしまう。「あかんやん」「落ちてばっかりや」子どもたちは、見守る。命を守る一大事の瞬間に保育者も何とかせねばと、ガーゼを垂らす案を子どもたちに提示した。「早く」と子どもたちも賛成し、ガーゼを垂らしたところで、子どもたちは降園時間になってしまったため、B保育者は動画を撮り始めた。A児は、「ちゃんと撮って明日絶対見せてね」と言って帰って行った。

#### <考察>

・この時点で、さなぎになる時、幼虫はミカンの木を離れるということをもみんな知らなかった。幼虫は、誰に教えてもらわずとも自分のさなぎになる場所を自分で見つけようとしていたのである。私たちは、幼虫の大ピンチだと思い、大騒ぎとなる。真っ白い網にぼつんと緑の幼虫が付いている光景に、危ない!と感じ、木に戻そうとするが幼虫は付こうとしなかった。「ここじゃない」と言っていたのである。落ちてはくにかくにやする幼虫を見て子どもたちは飼育ケースを持ってきた。幼虫を守る方法はこれしかない、と考えたのだと思う。

#### どうやって登ったの?

翌日、登園した子どもたちは、無事飼育ケースの蓋まで登っている幼虫を見て「ちゃんとさなぎになりかけてる」「じっとしてる」と安心する。B児が「どうやって登ったのかな」と言うので、動画を撮っておいたことを伝えると「見たい!」「早く見よう」とB児。「先生撮ってたの知ってるよ。ちゃんと撮れてた?」とA児。みんなが揃ってから視聴した。頭をあちこちにくにかくにや振りながらガーゼを登ろうとする幼虫の動画を見る。子どもたちは白いガーゼを登り出した幼虫に「あ、登ったね」「もにやっ、もにやっ、と上がっていく」「がんばれ、半分くらい体が離れてしまうと」「あ、危ない」、上の方まで来ると「もうちょっとや」「あと少し」「うんとこしょ、どっこいしょ」と幼虫を応援した。「もうすぐさなぎやな」「さなぎってどうやってくっつくのかな」「糸でくっ付いてるねん」など話す姿も見られた。

その後、幼虫は子どもたちに見守られながら、こげ茶色のさなぎになっていった。

追うようにして、もう一匹の幼虫もミカンの木から姿を消した。いくら探しても見つからない。数日後、年中児がバタフライガーデン近くの廊下の壁のへこみにさなぎを見つける。「ここにいたんや」「無事やった」と喜び、子どもたちは相談し、網をかけておいた。

#### <考察>

・動画を見ると、その場にいたかのように幼虫の無事を祈り応援する子どもたちの姿があった。一生懸命ガーゼを登る幼虫の動画を見たことで、幼虫の頑張る姿に心動かされたのだと感じた。見たい!と心が動いた時にタイミングよく視聴することで、子どもの気持ちが高まっていくと思われた。また、動画を見たことで、幼虫からさなぎになっていく過程が子どもたちの中でつながった。

#### 「大変、さなぎがカサカサになってる」

今まで幼虫の成長を静かに見守ってきたD児は、飼育ケースのさなぎを「まだ、アゲハにならないかな」とよく見ていた。そんなある日、D児は「大変、さなぎがカサカサになってる」「スプレー（霧吹き）してあげやんなん」と言うのである。A保育者がのぞいてみると、確かにカサカサして見える。スプレーしてよいものか、スプレーしたことで、さなぎに悪い影響はないのか、A保育者は、どう答えようか迷っていた。すると、B児が「スプレーしてあげ」「だって外のさなぎは雨とか当たって育つやろ。だからスプレーしてあげたらいいと思う」と言う。それを聞いた子が「もし、スプレーして死んでしまったらどうするの?」「大丈夫と思うけど」「でもそっとした方がいいのどちがう?」C児「もし、スプレーしてなんかあったとしたら大変なことになるから、そのまま置いとこうよ」。D児はその言葉を聞き、カサカサを心配しながらもそのままにしておくことにした。

さなぎは、毎日子どもたちに見守られながら、10日が経った。



### <考察>

・いつアゲハチョウになるのだろうと、楽しみにしながら、静かに見守っていたD児。さなぎをカサカサと感じたD児は、とても心配になったのだと思う。さなぎの命を守りたい、つなげたいという気持ちが伺えた。

### もうすぐ生まれるかも！

「いつ生まれるかな?」「まだやなあ」と楽しみにする子どもたちの毎日の中で、A保育者は、アゲハチョウが生まれる日を計算していた。このままいくと土日に生まれる、子どもと一緒に羽化を見たい、子どもと一緒にアゲハチョウに出会いたいと願っていたA保育者は、お願いだからなんとか今週中に生まれて!と切望していた。先日、飼育ケースで飼っていたツマグロヒョウモンの羽化の始まりをE児が発見し、子どもたちは感動を味わった。生で見た時の子どもたちの感動は大きく、今まで大切に守ってきたアゲハチョウの羽化は子どもたちにとって大きな感動を与えてくれる、みんなで見れたら最高なのに、と思っていた。

7月5日(金)、A保育者と子どもがさなぎをのぞいてみると、なんだか少し膨らんでいるように見えた。(色が少し変わって来ていたのをそう思ったのか?何らかの変化を感じたようである)「もうすぐアゲハになるかもしれない」「よくみんなが見てない間にチョウになってるから(モンシロチョウ)、静かにしとこう」とみんなで「しーっ」と言い合いながら静かに過ごした。弁当もおしゃべりをせず、さなぎを囲んで「まだやなあ」と確認しながら静かに食べた。早く生まれて!とA保育者。とうとう降園時間になるが、チョウは生まれぬ。「まだやなあ」「今日は生まれなかったね」これは、残念ながら土曜日じゃないかと思ったA保育者は「土曜日、日曜日に生まれたらどうしよう」と子どもたちに相談する。「もし土日にチョウになったら、死んでしまうかも」「置いとかれへん」「死んでしまったらあかん」子どもたちはそう考え、A保育者に託すことにする。「先生、見といてね」「頼むね」と言って子どもたちは降園する。アゲハチョウの命を任せられたA保育者は、ダンボールに飼育ケースを入れ、動かないよう梱包材で固定して家に持ち帰った。

### アゲハチョウの誕生

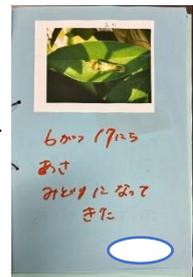
翌日7月6日(土)、大切な役目を背負ったA保育者は絶対に録画をしようと朝6:30に「アゲハチョウは?」と起きると、生まれたばかりのとても大きなアゲハチョウがいた。やってしまった!と思ったA保育者は急いで動画を撮る。やはり自然というものは思うようになってはくれない。生まれたばかりで羽はベロンとしていた。次第に羽は乾き、閉じたり広げたりするようになる。しかし、お昼になるとアゲハチョウはバタバタと暴れ出した。できたら月曜日に子どもたちと一緒に見たい、しかしアゲハチョウは大暴れしている。弱らせてしまったらどうしよう。逃がすしかないのか。A保育者は葛藤した。そしてB保育者に電話で相談。大切に育てた命である。動画を撮りながら逃がすこととなった。残念な気持ちとともに自分の力で飛び立ったチョウを見て、A保育者は、無事に一つの命を外の世界に帰すことができ、ほっとした。

### 元気でいてね

7月8日(月)、登園した子どもたちは「さなぎどうなったの?」「アゲハ生まれた?」と聞く。生まれたことを伝え、みんなで動画を見る。「羽、ふにゃふにゃや」「震えてる」「アゲハやったな」「羽かたまってきたかな」「(羽)開いた!」とじっと見つめる。A保育者は、「ものすごく大きなきれいなアゲハやってんよ」など、その時の感動を伝える。「見たかったなあ」と子どもたち。お昼過ぎ、バタバタと暴れるアゲハチョウを見て、「かわいそう」「怒ってる」「外に早く出して!」「出たいよ」と体を揺らしながらアゲハチョウの気持ちになってつぶやく。チョウが飛び立つ場面では、「あ、飛んだ」「飛んで行った」「よかったな」と友達と顔を見合わせ、無事飛び立ったことを喜んだ。長い間子どもたちが見守ってきたチョウは、一瞬にして飛び立って行った。

その後、「小さいたまご見つけたな」「1匹目の幼虫いなくなった」「せっかく大きくなったのに」「みんなで網毎日かけて守った」...など今までのことを振り返って話す姿が見られた。自分たちが守ってきたことで無事チョウになった喜び、守って来れたという喜びを味わうことができた。

また、その後、これまで撮影した写真を集め、日付やチョウと共に暮らした中での発見を書いた『あおむしにつき』が出来上がった。



### <考察>

- ・実際に見ることは叶わなかったが、動画を見たり、保育者のその時の感動した話を聞いたりしたことで、無事飛び立っていったかけがえのない一つの命を感じることができた。後日読んだ科学絵本とあいまって、チョウがたまごを産み、たまごからチョウになって飛び立ち、また卵を産むという命のつながりを感じることができたと思う。
- ・今までの幼虫との毎日を振り返ったことで、自分たちがしてきたことを再認識し、守ることができてよかったという思いをもつことができた。自分たちの力で幼虫を守ったという気持ちは、自己有用感をもつことにつながったように思う。
- ・令和4年度、令和5年度の年長児の取り組んだ図鑑作りの文化は、日記という形で令和6年度の子どもたちへとつながった。先人の作った図鑑を手にし、見たり調べたりした経験があったこと、写真とともに幼虫の成長を振り返ったことなどから、『あおむしにつき』という発想が生まれたと考える。『あおむしにつき』には、自分たちの発見や気づきを自分たちの言葉で書いており、できたことを知らせに回る姿が見られ、自分たちの『あおむしにつき』ができた満足感を味わうことができた。

### もう1匹はどうなった？

「そや、もう1匹はどうなった?」「同じくらいの時にさなぎになったはず」「まだ、チョウになってないかも」「見に行こう!」子どもたちは駆け出した。廊下のへこみにいるため少し見にくい。のぞき込む子どもたち。「あ、開いてる」「チョウになったんや」「よし、チョウになった!」と子どもたち。「ちょっとまって。でも、一番下のところぶにゅってしてる」と触るE児。「どれ?」とA児も触る。もう一度E児が触りながら「ああ…さっきのさなぎのからは、全部カリカリってしてたけど、こっちは下だけぶにゅってしてる」「でも、上ちゃんと開いてるよ」「ちゃんとチョウになったか、うまくなれへんかったか…」誰にも分からない。「どうする?」考えたみんなは「網かぶせとこう」とそっとかぶせた。



### <考察>

- ・もう1匹のさなぎを思い出し、子どもたちはどうなってるんだろうとドキドキしながら向かった。しかし、無事チョウになったのか、もしかしてなれなかったのかよく分からないという子どもたちの判断だった。子どもたちが、上の部分は開いているにもかかわらず、「網まだかぶせとこう」と答えを出したのは、もし命がなくなっていたとしたら、そっとしておいてあげたいという思いからのように感じた。命の尊さを感じることに繋がっていると感じた。

### たんぽぽ組さん(年中)も生まれてるよ

この日、ニンジン畑からやってきた年中のさなぎもキアゲハになっていた。年長児たちに見せたいとケースに入れたままのキアゲハ。廊下のさなぎを見た後、年長児がそれを見付け「早く逃がしてあげないと弱っちゃうよ」「食べるものもないし」など声をかけ、一緒に空に放った。よたよたと飛んでいくチョウを子どもたちは共に見送った。

### <考察>

- ・年長児たちの言葉からは、チョウは自然の中が一番よいのだと感じ、伝えようとしていたように思う。チョウにとっての“よりよい”を感じていたと思われた。

### 大切に思う気持ちは年中児にも

その後、夏休みにかけて、キアゲハやナミアゲハの幼虫が育っていき、廊下や草のところでさなぎになった。年中F児は、自分の見つけたさなぎを毎日無事かどうか気にして見ていた。ある夕方、ギラギラの午後の太陽がさなぎに当たっていることに気づき、「大変だ!」と植木鉢で影を作る。その後も毎日無事かどうか確認していた。色が少し変わっていた金曜日。そして月曜日の朝、さなぎが割れているのを見て「チョウになってる!」と満面の笑顔を見せる。しかし「あれ?」下の所が前の幼虫のように黒いと気付く。「大丈夫かな」と曇り顔。B保育者と共に割れ目をそっと開けると中が空っぽだった。「よかった。チョウになってるわ」と安心し笑顔を見せた。C保育者と一緒に脱いだ皮も見付け大発見であった。「ママにも教えよう」そして、友達に知らせに回っていた。

### <全体考察>

- 夢いっぱい作ったバタフライガーデン。たくさんチョウが来た!と喜んだものの、現実には、厳しいものだった。チョウがチョウになることはとても大変なことだと思いついた。自然の豊かな本園には、チョウにとっての天敵もとても多かったのだ。その中のほんのわずかに育っていく命を子どもと保育者が共に大切にしようとした。育っていく命の

中に消えていく命がたくさんあることを保育者だけでなく子どもたちも五感で感じたように思う。だからこそ、今、目の前にある命を大切に守らなければ、と思う気持ちがより膨らんだのではないかとされた。

- 子どもたちは、自然の中にある命を自然の中で守ろうとした。自然のあるがままの状態を大切にしようとしたのである。飼育ケースに入れれば、もっとたくさんのチョウが生まれていたに違いない。私たちもそれを想定し、近所のミカン畑の方に葉っぱを分けてもらえるよう話をしていた。しかし、子どもたちはそうではなかった。ミカンの木に生まれ、ここで育つことが幼虫のあるがままの暮らしであることを感じたのかもしれない。期待を込めて植えたミカンの木で、やっと出会えた幼虫だからこそ、子どもたちが思い付いた方法があるがままの状態を守ろうということだったのかもしれない。子どもたちは、幼虫にとって“よりよい”を選ぼうとしたと思われた。
- 子どもが幼虫とつながっていったように、保育者たちもまた、幼虫と出会う子どもたちとの毎日に心ときめかせ、つながっていった。子ども同士が情報交換したり情報共有したりしたように、保育者もまた情報交換し、情報共有しながら毎日を送った。命との出会いは、保育者の“よりよい”にもつながったのである。命との出会いを通して、命と人がつながり、人と人がつながっていき、みんなで命を守りたいと思う気持ちにつながっていったと思われる。
- チョウの命との出会いは、私たちの心を揺さぶった。子どもだけでなく、保育者である私たちも、生き残る命のすごさに心動かされた。保育者もまた、夢中になって見たり調べたりした。小さなたまごが1か月にして形を変えながらアゲハチョウになっていくこと、さなぎになると一度中身がすべて溶けてチョウになっていくこと、さなぎになる前の幼虫の背中には液体が逆流していたこと…驚きの連続であった。幼虫との暮らしの中で、生きていることの神秘さ、不思議さ、偉大さとともに、力強く生き残っていく命に畏敬の念を抱くこととなった。

## V 子どもたちの思いは未来につながる

令和4年度、春、1匹のシャクトリムシを見つけた年長児たちが「写真を撮って集めたらいい」と発した一言から、写真を撮ってプリントアウトし、調べたそのものの名前と発見者の名前を書いて大発見ボードに掲示していくことが始まった。大発見を友達と共有することができる大発見ボードは、たちまちいっぱいになり次々と貼り替えられていった。1年間撮りためた写真は、自分の大発見の足跡としてポートフォリオになればよいと保育者は考えていた。子どもたちに「たくさん集まったね、どうしよう？」と尋ねると、自分の図鑑にしたいと言い、一人一人の自分だけのオリジナル図鑑が出来上がり、修了記念に持ち帰った。

令和5年度、春、令和4年度の子どもたちが作った自分図鑑のコピーを飾っていると、年長になった生き物が大好きなG児が手に取り、「すごーいよ、すごーい!これすごーいよ」「ねえねえ欲しいよ」と夢中でページをめくる。B保育者は、「あげられないけど貸してあげることはできるから、持って行って先生と相談しておいで」と図鑑を貸した。担任のE保育者は、G児の願いを受け止め、クラスのみんで話す時間を作った。当時は6名のクラスだった。6名とも図鑑を作りたいと言い、写真をたくさん撮って自分たちも図鑑を作ることにした。今まで以上に発見したものの写真を撮るようになった。それだけではなく、テントウムシがたまごから成虫になるまでを自分たちの写真で追った『てんとうむしずかん』を始め、『ちようとのずかん』『どんぐりとはっぱのずかん』などを作った。「チョウの写真を撮りたい」という願いは、令和6年度のバタフライガーデンへとつながっていった。



令和6年度、1年生となったG児が、雑誌の4月号で募集していた「きみのゆめをかなえようコンテスト」に“ヘラクレスオオカブトの写真を撮りたい”と応募し、採用されたことを母親から聞く。G児がヘラクレスオオカブトにカメラを向けている写真などが雑誌の見開きに掲載されていた。G児は今でも見つけたものの写真を撮っており、図鑑の1ページにしたいという願いをもったと聞いている。夏休みの自由研究でもこのようなことに取り組んでいた。G児の生き物が大好きと思う気持ちは、園児の頃から今につながり、未来につながっていくのだと思えた。

# VI 研究を振り返って

## ○ “つなげて つながる”を生み出す保育を

令和4年度、自然と関わり撮りためた写真を綴った自分図鑑の取組は、令和5年度へとつながっていった。その中で「チョウの写真を撮りたい」「チョウに来て欲しい」と試行錯誤しながら取り組んだことは、バタフライガーデンへとつながり、令和6年度の“小さな命を守りたい”につながっていった。子どもたちの中から生まれた思いや願いを見つめ、大切にしていくことで、“つなげて つながる”が様々な生み出されていった。子どもたちと保育者のつながりの中で、新たな“つなげて つながる”が生み出されていくようなわくわく感のある毎日を、保育者同士がつながりながら、子どもと共に創造していきたい。

## ○ 五感で命を感じる

子どもたちは、自然との関わりの中で、形を変えて育っていく小さな命と触れ合い、五感を通して命を感じる経験をした。人生の基盤となる乳幼児期に、心を通して命と触れ合うことは、何よりも大切である。子どもたちが心を動かし幼虫と触れ合うことは、命と向き合うことであったと感じている。命と向き合い、子どもたちの心の根っこに、生涯にわたる宝物となる『センス・オブ・ワンダー』（生きる力の源となる）を育むことができるよう、今後も、感性を存分に働かせながら、子どもたちとの暮らしを楽しんでいきたいと思った。

## ○ 思うようにならないことと向き合う力

命と出会う中で、自然とは、思うようにならないことを実感した。なぜ育たない？ なぜ土曜日に羽化？ それでも、子どもたちと保育者たちは、その瞬間を精一杯よりよくなるようにとの思いで考えてきた。子どもたちの未来には、たくさんの思うようにならないことがあり、それと向き合い、よりよく生きていこうとする力が望まれる。子どもたちには、これからいろいろな出来事と出会う中で、自分と向き合い、自分の力で、また他者の力を借りたり協力したりして一つ一つを乗り越えながら、よりよい人生を送って欲しい。そのためには、幼児期をどのように過ごせばよいのか、いつも自分たちに問いかけていきたい。

## ○ 私たちは、地球の中で生かされている

幼虫との暮らしの中で、子どもたちと保育者は、“つなげて つながる”命とともにつながらない命に出会うこととなった。つながらない命がこんなに多くあるとは、思ってもいなかった。その命にはかなさを感じた私たち。子どもも同じように感じていたように思う。一方で、力強く生きていく命にも出会うことができた。命の力強さはかなさは、ともにあった。自然の厳しさ、偉大さを思い知らされ、畏敬の念を抱くこととなった。様々な命は、地球の中で生かされていた。私たち人間も同様に地球の中で生かされている。子どもたちが、命を大切にできる人になるために、私たち大人が“生かされている命”であることを自覚し、命を大切にしていかなければならないと思う。そして、目の前のかけがえのない存在の子どもたちを、愛情いっぱい大切に育てていき、将来、自分の命も人の命も自然界に生きる命も大切にできる人になって欲しいと思う。

## ○ 自然を大切にすることは地球を大切に思うことにつながる

この研究を通して、自然とは命あるもの、それは地球の一部であり、自然・命を大切にすること（“よりよい”を考える）ことは地球を大切にすること（“よりよい”を考える）ことにつながるということが分かった。また、幼虫のあるがままを受け止め、自然の中で大切に守ろうとしたことは、幼虫にとっての“よりよい”を考えることであり、それは、私たちの暮らしを豊かにし、私たちの“よりよい”へとつながった。自然・私たち人間を含めた命の“よりよい”を考えることができる感性を子どもと共にもち続けたい。

## ○ 命と出会い、様々な“つなげて つながる”中で“よりよい”を生み出す

子どもが心を動かしたつなげようとした命との出会いは、子どもと命、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人、大人と命、様々な“つなげて つながる”を生み出した。“つなげて つながる”暮らしの中で、子どもたちは、たくさんの“よりよい”を生み出した。子どもたちの“よりよい”に向かう日々の一つ一つのプロセスが、科学する心であった。科学する心は、心を動かした出会いから“つなげて つながる”中で、“よりよい”を考え生み出していくこと、そして私たちも“よりよくなる”ことであると思われた。

上記のように、研究を通して、私たちは様々なことに気付かされた。今後も職員で気付きを共有し、園での暮らしをより楽しみ豊かにしていけるよう研鑽していくことや、対話をさらに大切に、子どもの思いや願いをみんなで見つめ、子どもの見方を深めながら“つなげて つながる”毎日を創り出していくことを課題として取り組んでいきたい。

## 最後に

### ○ “自然”というものを心から敬い、畏敬の念をもち、“よりよい”を考えていくことこそが、科学する心を育むことである

と、私たちは認識を確かにした。

これからも自然と共にある暮らしを私たちの喜びとし、“よりよい”を考えていく毎日を子どもと共に積み重ねたい。

### ○ “つなげて つながる 命との出会い”が生まれたのは、豊かな自然環境に恵まれていたことが大きい。ここで暮らす子どもたちは、命と出会い、自然の中であるがままを受け入れながら“つなげて つながる”や“よりよい”を生みだしていった。子どもにとって豊かな自然環境はとても大切なものであり、科学する心を育む源であると感じた。木々や草、小川、風、生き物など、自然をいつも感じて育つことができる環境があることは尊いことだと、子どもたちとの暮らしから感じる事ができた。ここで、子どもと共に育ち合うことができることを幸せに思う。豊かな自然環境のある幼稚園であることに感謝しながら、子どもたちとよりよく暮らしていきたい。

研究に携わった職員 大内 菜恵子(園長)(研究代表) 牧 愛由美(教頭) 加古川 愛世 瀧口 佳奈  
足立 優香 西木 亜紀子 北村 和美 中山(中島) 愛奈(令和5年度)